

タイトル	江戸時代の高山寺僧「永辨」について
著者	徳永，良次；Tokunaga, Yoshitsugu
引用	北海学園大学人文論集(64)： 316(1)-291(28)
発行日	2018-03-31

江戸時代の高山寺僧「永辨」について

徳 永 良 次

一

京都の古刹高山寺は、明恵上人が神護寺の別所であった十無盡院の地を後鳥羽上皇から賜り、華嚴・真言兼学の寺院として隆盛を誇った。高山寺における活動については、草創期の鎌倉時代に関しては、相当程度明らかにされている。しかしながら、室町時代以降、次第に自然災害や戦乱を受け荒廃していったため、中世以降の活動には不明な点が多く、今なお未解明のまま残されていると言っても過言ではない。明治期に入り、廃仏毀釈の混乱を避け、貴重な文化財を保護すべきであるという機運を受け、ようやく落ち着きを取り戻していった。つまり、室町期から江戸期にかけて四百年以上もの間、非常に不

安定な状況に陥っていたのである。

筆者はかつて「高山寺代々記」と称される、寺内の子院代々を記載した資料について検討・紹介したことがある。^(注)その中の十無盡院第十六世の部分に「永辨」と僧名があり、その右肩に「中興」という書き入れがあることが注目される。別に三尊院の十二世「秀融」にも「中興」と記載されている。「中興」とあるのは、この二名のみであって、いつ・誰が・なぜ、このような名称を冠したのか、また、その理由については十分に明らかになつたとは言えない。この二名の僧侶共に、先行研究でほとんど触れられたことのない人物である。とりわけ、永辨の事績に関しては、これまで網羅的な紹介がなされたことが

なく、近世高山寺において如何なる位置づけにある僧侶なのか、ここで検討すべき時期にあると考え、まずはその基礎的作業として、寺内に現存する永辨に関する資料を可能な限り取り上げて、紹介・検討してみたい。なお、ともに「中興」とされる「秀融」に関しては、現状では資料が見当たらず、後日、別途検討したいと考えている。

二

江戸時代における高山寺僧と高山寺の歴史についての研究で管見に入った主要なものは次の通りである。特に、永辨に関して直接言及している資料を優先して紹介し、他に関連した時代や活動に関わる論考も触れていくこととする。

1 葉上照澄『高山寺』^(注1)

葉上師は、明恵上人の事績を中心に、その後の高山寺の歴史について概観されている。特に、従来未解明・未検討の、中世から近世の歴史の整理は卓越したものであり、豊富な高山寺資料を駆使して一般の読者層にも分か

(一)

りやすく解説している。

中世、特に応仁の乱以降における高山寺内の荒廃ぶりについて、葉上師は以下のように指摘している。

十無盡院代々名は応仁頃から消え、慶安頃(一六四八)から再興に当たった中興十六代永弁に至るまで二百年余の断絶の期間がある。

東坊方便智院代々も天文頃で消え、最後の二代は三尊院代々と同名なので三尊院と合併又は断絶と考えられる。わずかに田中坊善財院、尾崎坊三尊院、山本坊報恩院、宝性院が高山寺最悪の戦国時代を連綿と存続したらしい。『高山寺』p113)

波線部に示したように、永辨を「中興」と記している。これが何を根拠にしたものかは明記していないが、筆者の知る限り、永辨を中興と記す資料は、村上素道『梅尾山高山寺明恵上人』記載の「代々記」しかない。^(注2) 続けて中世末期の内乱が引き起こした被害については以下のように記述する。

天文十六年（一五四七）七月、細川晴元が高雄を攻略した時、高雄の伽藍と共に高山寺の金堂・十三重塔伽藍の多くは灰燼に帰し、仏像等の貴重な寺宝が多数焼失し、わずかに石水院・御廟・経蔵（又は鎮守社）・仁王門・院坊三坊と想像される七つの建物が残存した。（同p113）

次に、近世における高山寺について以下のように触れる。本稿に関係の深い部分のみを引用する。

復興の業は江戸初期の寛永十一―十三年（一六二三―三六）、秀融上人、永辨上人等によりはじめられ、金堂・開山堂が復興を見た。この時の金堂が現在の金堂である。

現在の高山寺金堂は寛永年間、仁和寺覚深法親王の御願、家光の令旨をもって、板倉周防守の奉行により仁和寺古御堂を移転したものであるという。（同p114）

このように、江戸時代に入って、幕府の庇護により寛永年間に復興の業が実施された。この時の中心となった

のは仁和寺の覚深法親王と顕証である。覚深法親王は、仁和寺二十一代、後南御室と称せられる。高山寺との関わりは、寛永十年の聖教の整理と目録の整備がある。また、翌十一年には、寺内外の措置に関する「高山寺置文」を定めた。

顕証は一五九七年生まれで仁和寺心蓮院のち尊寿院に住し、宥厳と高山寺菊淵から広澤流を承け、その後仁和寺高山寺の寺基整備にあたり、さらには両寺の聖教整備に尽力した。^{（注四）}葉上師は、覚深法親王・顕証と秀融・永辨とが、高山寺復興に際して、如何なる関係にあったのか、具体的な事実・資料等までは示していない。

2 奥田勲「高山寺経蔵の室町・江戸時代の典籍について」^{（注五）}

この論考は、主として聖教文書等の典籍類がどのように保管されていたかについて、現存する聖教目録を網羅的に検討したものである。特に、室町時代文明年間に成立したと考えられる『方便智院聖教目録』（旧目録）と、江戸時代寛永年間に、現存書籍に従って整理された『方

便智院聖教目録』(新目録)の両者を詳細に比較検討し、室町期から江戸時代初期の典籍がおかれた状況について論じている。

さらに、江戸時代初期における覚深法親王を中心とした経蔵の再整備については、覚深法親王の残した「仁和寺宮覚深法親王高山寺置文」二種を中心に紹介し、この時期における寺内経蔵と典籍のおかれた状況を論じていき、結論として以下のようにまとめている。

中世末期の内乱的な状況は、古代・中世を通して形成されて来た有形・無形の文化的遺産の伝承を大きく阻害するものであったのだが、高山寺の場合もまさしくそれに該当するといつてよい。この時期に失われたのは典籍文書の大きな部分であるというだけでなく、その典籍文書の有していた体系や秩序も失われてしまった。江戸期の整理はそれを回復するのにかなりの力はあったと考えられるが、必ずしも十分ではなかった。しかし、高山寺の典籍文書はその後の関係者の護持によって、主要な部分はきわめてよく保存されている。(同P140)

(四)

3 『方便智院聖教目録』(新目録)(金水敏「方便智院聖教目録解題」、『明恵上人資料第四』、東京大学出版会、1998年)

前述した奥田氏の論考の内、江戸時代寛永年間に、この時点で現存していた聖教・書籍を保管・整理するため作成した『方便智院聖教目録』(新目録)についての、影印・翻刻・解題である。金水氏は、この中で書誌的事項、新旧目録間での比較、さらには方便智院本の性格と成立等について検討する。

高山寺経蔵の聖教目録については、従来、鎌倉時代の草創期に作成された目録と、そこに記載された聖教の性格を通じた研究が多かったが、この論考によって初めて江戸時代の聖教目録とその成立についての検討がおこなわれ、注目されるようになったと言える。

4 近世末の高山寺僧「慧友」の事績

江戸時代における高山寺僧の研究は、慧友僧護を外すことは出来ない。慧友は江戸時代末期に高山寺に住した僧侶であるが、膨大な聖教類にその名、あるいは書き入

れなどを残し、現在の研究に極めて有益な資料となっている。慧友の記録がなければ、高山寺草創期における活動が未解明のままである事項も非常に多い。しかしながら、その慧友に関する事績についての研究は非常に少ない。近年になって以下の論考が知られる程度である。

1、小宮俊海「慧友僧護について——高山寺所蔵典籍

文書に基づく年譜資料——」^(注六)

表題の通り、高山寺に所蔵されている典籍文書や、その他研究資料・論文等から、慧友に関する記事を網羅的に調査し年譜とした労作であり、これによって慧友の高山寺における事績を概観することが可能となった。

それ以外に、松尾芳樹「六角堂能満院工房と律僧憲海」(京都市立芸術大学、2015年)がある。これは、松尾氏の博士論文であり、京都市立芸術大学大学院の博士学位論文として氏が提出したものが公開されている。内容は、江戸時代末期の六角堂と憲海という僧侶についての美術史的研究であるが、その中に憲海と関わりの深い僧侶として、慧友が取り上げられ、憲海とともに慧友の高山寺における活動を紹介している。

5 筆者による論考

以上の先行研究の他に、筆者は、中世・近世の高山寺の活動状況を検討した論考を公開している。

寺内子院である方便智院と『方便智院聖教目録』の關係について、現存する聖教に記載された記事や目録類から定量的に検討したことがあり、聖教の大幅な減少は見られるものの、江戸時代にかけて方便智院聖教は比較的多くまとった形のまま保管されてきたことを明らかにした。^(注七)

他に、江戸時代の子院の名を冠した聖教目録類三種について、翻刻と書誌を中心に紹介したことがある。

- ① 『高山寺地藏院聖教目録』について（平成二十四年度高山寺典籍文書総合調査団編「研究報告論集」、2013年）
- ② 『高山寺蔵（善財院聖教）目録』について（平成二十五年度高山寺典籍文書総合調査団編「研究報告論集」、2014年）
- ③ 『高山寺蔵『拇尾聖教目録』について』（平成二十六年高山寺典籍文書総合調査団編「研究報告論集」、

2015年

先の1にも紹介したが、中世末期の内乱を経た高山寺に残った僧房は、田中坊善財院(地藏院)、尾崎坊三尊院(十無盡院)、山本坊報恩院、宝性院などであり、他の由緒ある塔頭名は資料を辿る限りほとんど見いだせなくなっている。そんな中でも、地藏院は中世末期から近世初中期にかけて、隆盛を誇ったと見られる数少ない僧房である。ここには、ある程度まとまった聖教が保管され、その目録も作成されていたことが現存資料から知られる。上記の①から③は、それら子院の聖教目録についての論考である。

また、「持戒清浄印信」という資料を通して、中世から近世の寺内子院と、それを代々相承した僧侶に関して検討した論考も公開している。

④「持戒清浄印信」の写本とその価値の変容^(注八)

「持戒清浄印信」は、明恵上人が紀州にて修行していた時に、上人の現前に文殊菩薩が現れ持戒清浄の印明を授けたとされる奇瑞を、代々の僧侶が相承していたことについて検討したものである。この中で、代々の相承が特

(六)

に中世後期に盛んになり、江戸時代にかけて次第にその「印明を伝授する」という、それ自体に權威性を帯びていくことを明らかにした。

三

上述したとおり、江戸時代における高山寺とりわけ僧侶の事績についての研究は極めて少なく、特に江戸初期の高山寺については、寛永期の覚深法親王・顕証といった仁和寺の僧侶についての研究から見た、高山寺復興という観点からしか研究がなされていないのが現状である。

そこで、本稿では、一部資料等に「中興」と記載された永辨の事績について、高山寺の典籍文書を網羅的に調査し、また、管見に入った、あるいは新発見の資料も含めて、以下年表形式で整理していくこととする。

本稿で主に参照した資料は、以下の通りである。

- 1、高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺典籍文書目録』
- 第一―四、索引、完結篇
- 2、同『高山寺古文書』

- 3、同 『高山寺経蔵古目録』
- 4、同 『続高山寺経蔵古目録』
- 5、同 「研究報告論集」昭和五十六年度～現在まで（五十七年度を除く）

上記の資料の索引等から永辨に関わる記述が含まれる資料を抜き出し、年代順に配列していく。さらに、それがどのような活動であるのかについても示している。

表の配列は、西暦・和暦・活動事項・典拠資料・所在・備考・書写年代とし、永辨の活動について、いつ・どこで・（誰が、誰に）・何を・どうしたか、という事項につ

いて簡略に示すこととした。活動事項欄の大まかな基準としての用語は「書写・伝授（伝受）・作成・場所」などというもので、特に伝授については「誰が誰に、どこで」という部分が判明するものについては簡略に示すこととする。備考欄には、必要に応じて、奥書・年齢・その他、補足すべき項目を掲げる。

これら資料は、筆者が高山寺において可能な限り原本調査も実施し誤りのないことを確認しているが、なお遺漏の虞なしとしない。後考を期したい。

1643	1642	1632	西暦
寛永二十年	寛永十九年	寛永九年	和暦
書写。さらに正保四年心蓮院経蔵本を以って書写	書写。伝領か？	喜海自筆本を書写	活動事項 (書写・伝受・その他)
大樂金剛不空眞實三摩耶經 般若波羅密多理趣品	施餓抄	高山寺涅槃會法式	資料名
36	118	133	函
5	51	3	番号
			子番号
寛永廿年十月一日書了／梅尾陰者 ／非人永辨 正保四年三月六日以 心蓮院経蔵／本寫取之畢金剛仏子 永辨			備考 (奥書・その他特記事項)
寛永二十年	寛永十九年	寛永九年	書写年代

1645	1645	1644	1644	1644	1644	1644	1644	1644	1644	西暦
正保二年	正保二年	寛永二十一年頃	寛永二十一年	寛永二十一年	寛永二十一年	寛永二十一年	寛永二十一年	寛永二十一年	寛永二十一年	和暦
高山寺経蔵本を書写	中坊東廊にて顕証本を書写	槇尾にて聞書	中房御本を書写	仁和寺眞光院本を書写	書写	中坊経蔵本を書写	中坊徳圓之房屋にて書写	中坊経蔵本を書写	灌頂加行の時、観海院御本を書写	活動事項 (書写・伝受・その他)
新編諸宗教蔵総録巻第一	題未詳	教誠新學比丘行護律儀聞書	題未詳	護摩抄池上	羅漢供祭文	十八道念誦私次第	弘法大師七十二箇條之禁制	表白神分等十八道	金剛界次第	資料名
117	154	138	156	79	113	95	112	95	95	函
37	93	24	13	89	39	34	59	34	34	番号
1			19			2		5	3	子番号
		(表紙) 永辨 於槇尾聞之		此抄以仁和寺眞光院本書写之了／ 寛永廿一年十一月九日 金剛弟子 永弁 ^{九十}		朱點(ヲコト點・円堂點、江戸初期)			朱點(ヲコト點・円堂點、江戸初期)	備考 (奥書・その他特記事項)
正保二年	江戸初期	江戸初期	寛永二十一年	寛永二十一年		寛永二十一年	寛永二十一年	寛永二十一年	寛永二十一年	書写年代

江戸時代の高山寺僧「永辨」について（徳永）

1650	1650	1650	1650	1649	1647	1647	1647	1647	1647	1646	1645
慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安二年	正保四年	正保四年	正保四年	正保四年	正保四年	正保三年	正保二年
十無盡院にて両部灌頂を宥 厳より伝受	高山寺関伽井坊にて石水院 経蔵本を書写	伝受	書写	随心院御門御本を校合 石水院経蔵本を書写	渡江菴にて書写	顕証本を書写	宥厳より伝受	補う 虫払いの時書写、他本にて	書写	関伽井坊にて書写	高山寺経蔵本を書写
宥厳授與許可印信 永辨受者	華嚴十重唯識義	臨終大事（傳授識語）	臨終大事	金師子章光顯鈔卷下	金師子章光顯鈔卷上	持戒清浄印信	持戒清浄印信	恒例行業次第	金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經	諸流通物傳受記	新編諸宗教蔵総録卷第二・ 卷第三
110	119	110	110	119	119	148	148	88	1	112	117
86	11	11	11	32	31	67	75	11	32	28	37
2		3	2				9				2
						ヲコト點・円堂點		石水院修理時期不明	于時正保四年正月廿二日不恥惡筆 書写之了金剛仏子永辨		
慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	江戸初期	正保四年	正保四年		正保四年	正保四年	寛政六年	正保二年

1650	1650	1650	1650	1650	1650	1650	1650	1650	1650	西暦
慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	慶安三年	和暦
宥 蔽より伝受	宥 蔽より伝受	閑伽井坊にて、 顯証を書写	石水院経蔵本を書写	顯証本を書写	法住庵御自筆本を書写	虫払いの時、石水院経蔵本 を書写	虫払いの時、石水院経蔵本 を書写	石水院経蔵本を書写	十無盡院にて伝法院流を宥 蔽より伝受	活動事項 (書写・伝受・その他)
宥 蔽授與許可印信 永辨受者	秘密傳法灌頂秘印	傳法院流五重大事并三重大 事等記	小寶螺講日記	諸尊本経并可引見具書目録	大通法類聚抄	高野中院御堂	金剛界神秘	華嚴還源觀科二	傳法院流諸大事傳受記	資料名
110	110	87	113	113	84	112	63	119	91	函
9	85	115	55	72	28	18	17	39	17	番号
	3	1							2	子番号
慶安三年	「大師」ヨリ「兼海已下如門流」ニ 至ル血脉アリ 慶安三年				寛永十九年觀海院にて顯証が書写、 慶安三年永辨が書写 慶安三年	虫払いの次以石水院経蔵御本／寫取 之了慶安三年六月日／沙門永辨 慶安三年		(卷首) 伝法院流諸大事伝受記受法 下資永辨年廿五 夏一四(以下略) 慶安三年	備考(奥書・その他特記事項)	書写年代

1654	1654	1654	1653	1653	1653	1653	1653	1652	1652	1651
承応三年	承応三年	承応三年	承応二年	承応二年	承応二年	承応二年	承応二年	慶安五年	慶安五年	慶安四年
顕証自筆本を書写。二九日より求聞持法を始め	顕証自筆本を書写。二九日より求聞持法を始め	関伽井坊で石水院経蔵本を書写、校合	三尊院宏盛から顕証が伝受されたものを書写	中坊本を書写	顕証自筆本を書写	石水院経蔵の定真本を書写	石水院の仁真自筆本を書写	石水院経蔵本を書写	関伽井坊にて書写	渡江菴参詣の折、両部印明を伝受・書写
求聞持法	求聞持次第御作	菩薩戒本持犯要記	廣澤傳受私記保	菩提心論異本 菩提心論愚疑 (二書合冊)	菩提心論科文	光明眞言加持土沙義	文永六年灌頂記廣澤	金師子章勸文	三時禮釋	二翼
77	76	138	112	127	127	118	112	119	119	84
30	34	22	46	7	39	64	47	27	25	35
金剛仏子永辨 二十九歳	承応三年 ^甲 七月廿五日顕証師自筆之本寫之了 同自廿九日開持始行之	了 (朱書) 同七月十八日點之了／一校	金剛仏子永辨／歳廿八						了 □ ^(安カ) 五年夏比関伽井坊／□之 沙門永辨	金剛資永辨 五廿
承応三年	承応三年	承応三年	承応二年	承応二年	承応二年	承応二年	承応二年	慶安五年	江戸初期	江戸初期

1655	1655	1655	1655	1655	1655	1654	1654	1654	西暦
明暦元年	明暦元年	明暦元年	明暦元年	明暦元年	承応四年	承応三年	承応三年	承応三年	和暦
東大寺金珠院別房で見性院御本を書写	東大寺で見性院御本を書写	書写、琳弁が助筆	東大寺四聖坊で御本を永辨	東大寺四聖坊で円智の御講談の時、書写	仁和寺天供行の時書写	渡江菴にて顕証本を書写	顕証自筆本を書写。廿九日より求聞持法の行を始め	求聞持法修行中、渡江菴にて顕証自筆本を書写	活動事項 (書写・伝受・その他)
花嚴宗論義 師講	花嚴宗論義	五教章上卷聞書下自乗(朱補) 「教」開合至施設異相	五教章上卷聞書下自乗(朱補) 「教」開合至施設異相	五教章上卷聞書上自一乗義至 分教開宗	浴像作法	虞空藏求聞持次第	求聞持法	虚空藏菩薩能滿諸願最勝心 陀羅尼次第	資料名
123	123	123	123	123	90	137	111	61	函
23	22	21	19	20	14	10	100	31	番号
					6				子番号
		東大寺／四聖坊御本申出寫之了／ 花嚴末葉 永辨						承応三 ^甲 午年七月晦日求聞持修行 中以顕証自筆本於渡江菴寫書之了 沙門永辨 ^{廿九}	備考(奥書・その他特記事項)
明暦元年	明暦元年	明暦元年	明暦元年	明暦元年	承応四年	承応三年	江戸末期	承応三年	書写年代

江戸時代の高山寺僧「永辨」について（徳永）

1660	1660	1659	1659	1659	1659	1658	1656	1656	1656	1655
万治三年	万治三年	万治二年	万治二年	万治二年	万治二年	明暦四年	明暦二年	明暦二年	明暦二年	明暦元年
書写 関伽井坊にて顕証自筆本を	顕証より伝受ならびに書写	顕証自筆本を書写	宥厳より伝受	菩提院流伝受の時、一覽す	仁和寺尊寿院にて書写	修正後夜の導師を勤め、善財院の本を書写	高野山光臺院にて書写	高野山光臺院にて書写	高野山光臺院にて書写	東大寺で五教章聴聞の余暇に書写
両流肝秘裏書	三度大事 両流肝秘傳受記并菩提院方第	印法	菩提院方伝授 第三	傳受記	金剛頂瑜伽護摩儀軌	高山寺修正後夜導師作法	六書之目	六十心網要	一念成佛論慈覺大師御作	華嚴新撰目錄／肝要抄
95	95	110	95	91	61	197	176	125	117	123
24	17	185	24	17	50	69	2	45	47	15
2-3		4-4	1-2	1						
					萬治二年正月廿五日於于尊寿院／ 寫書之畢 惡筆憚多者也／求法沙 門永辨	（奥書）明暦四年正月七日修正後／ 夜導師 勤仕之砌書寫／之寫本善 財院古本也／華嚴宗末孫 沙門永 弁／三十二				
万治三年	万治三年	江戸初期	江戸中期	安土桃山時代	万治二年	江戸末期	明暦二年	明暦二年	明暦二年	

1661	1661	1661	1661	1661	1661	1661	1660	1660	1660	1660	西暦
寛文元年	寛文元年	寛文元年	寛文元年	寛文元年	万治四年	万治四年	万治三年	万治三年	万治三年	万治三年	和暦
建保三年奥書高弁本に勘注	勘注	勘注	勘注	勘注	顕証御草本を書写	顕証御草本を書写	十無盡院にて石水院経蔵本を書写	十無盡院にて書写	顕証師御奥書之本を書写	宥厳より伝受	活動事項 (書写・伝受・その他)
涅槃講式勘注	舎利講式勘注	遺跡講式勘注	如來遺跡講式勘注	涅槃講式勘注	卷數用意抄	卷數用意抄	多聞天講式	某授與許可印信 受者 覺經	許可	最極秘密灌頂印	資料名
48	48	48	48	48	71	71	113	110	95	95	函
14	11	13	10	12	3	2	69	87	36	24	番号
									3	4-2	子番号
寛文元年六月四日勘注功畢／花嚴宗末子沙門永辨	寛文元年閏八月七日粗／勘注之畢	寛文元年六月廿九日申題勘注了／花嚴宗末子永辨	寛文元年六月廿九日申題勘注了／花嚴宗末孫永辨	寛文元年六月四日勘注了之／沙門永辨		71函3の写本				朱點(ヲコト點・東大寺三論宗點、江戸初期)	備考(奥書・その他特記事項)
江戸初期	江戸初期	江戸初期	江戸初期	江戸初期	万治四年	江戸中期		万治三年	万治三年	万治三年	書写年代

1664	1663	1663	1663	1663	1663	1663	1662	1661
寛文四年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文二年	寛文元年
石水院経蔵本を書写	顕証より伝受	仁和寺尊寿院にて伝受	宥厳一周忌の供養に永辨書写後に顕証が開題供養	仁和寺尊寿院にて両部印可を顕証より伝受	賢首院にて顕証より安井流を伝受	十無盡院南面で安井流伝受の時、師之御本を書写	中坊経蔵本を書写	建保三年奥書高弁本に勘注
祈願集	顕証授與許可印信	愚行傳受記	(題未詳)	顕証授與許可印信 受者永辨	顕証授與許可印信 受者永辨	延命招魂作法	華嚴一乘十信位中開廓心境 佛佛道同佛光觀法門	如來遺跡講式註梅尾二月十五日中夜分
87	110	110	166	110	110	第二部	123	48
113	91	149	26	18	16	378	39	15
	2			2				
				(巻首)「傳燈大法師位永辨／授印可」(末尾)右於城州仁和寺尊寿院道場／授両部印可畢／寛文三年 癸卯 五月十三日／大阿闍梨顕証	(端裏書)「安井御流」(末尾)右寛文三年 癸卯 二月廿九日戊辰 妻宿曜 於賢首院道場奉對師主大阿闍梨顕証受印可畢安井末流弟子永辨	了」／寛文三 癸卯 年於十無盡院南面以師之御本寫取之了沙門永辨于時安井流伝受内也	ヲコト點・田堂點(朱書)「一校之了」／寛文三 癸卯 年於十無盡院南面以師之御本寫取之了沙門永辨于時安井流伝受内也	元治元年七月十七日六角堂能満院大願
寛文四年	寛文三年	江戸中期	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文二年	江戸末期

1669	1669	1669	1668	1666	1666	1665	1665	1665	西暦
寛文九年	寛文九年	寛文九年	寛文八年	寛文六年	寛文六年	寛文五年	寛文五年	寛文五年	和暦
或人の本を書写	古本を書写	南勝院實賀自筆本を書写	十無盡院において石水院経蔵本書写	石水院御本を書写	虫払いの時雑之箱から取り出し書写	虫払いの時、高山寺関伽井房にて書写	梅尾山摩尼殿にて顕証より伝授、後日書写	石水院経蔵本の四本を顕証が校合、その後摩尼殿にて伝受	活動事項 (書写・伝受・その他)
華嚴心要	三重塔蟲供養請定 寛文三年十月 日	初後夜	一切經律論等發題一首	華嚴宗種性義抄	華嚴佛光觀聞書	觀智記上中下	華嚴經心陀羅尼	華嚴入法界四十二字觀門	資料名
123	309	95	136	123	123	118	62	123	函
37	11	32	6	41	14	65	125	38	番号
									子番号
	(紙背)「右之記録永正十四年所記歟」 「寛文九 _己 酉年二月／三日以惣寺古本寫書之了／沙門永辨」			慧友による奥書写し	(奥書) 寛文六年六月廿八日虫払い次自雑之箱取出之了／大切之間書故雖少々不足寫書之了／花嚴宗永辨				備考 (奥書・その他特記事項)
寛文九年	江戸初期筆		寛文八年	弘化三年	寛文六年	寛文五年	文化十二年	寛文五年	書写年代

1672	1672	1671	1671	1670	1670	1670	1670	1670	1669	1669
寛文十二年	寛文十二年	寛文十一年	寛文十一年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文九年	寛文九年
安井大僧正の自筆本を書写	勝恵房の詔えに依りて書写	石水院経蔵本を書写	寛文十一年（存疑）、琳弁が永辨に対して重校し奉じる	明恵上人自筆本を書写	石水院経蔵の喜海自筆本を書写	石水院経蔵本を書写	石水院経蔵本を書写	永辨御房の本を琳弁が書写	石水院経蔵本を書写	石水院経蔵本を書写
線索抄	聖天供次第私	常修佛光観略次第	・sancs 要秘鈔 第八	禪法要解卷上・下	華嚴清涼國師禮讚文并叙	華嚴經探玄記卷第四	續華嚴略疏刊定記卷第四	花嚴佛光三昧觀冥感傳	華嚴入法界四十二字輪瑜伽（外題）	梅尾説戒日記
68	82	48	66	136	119	119	119	119	129	48
21	159	17	55	20	15	28	30	26	10	8
				2						
同（寛文十二年五月五日以件御自筆寫書之／了／沙門永辨		寛文十一年林鐘廿□／以石水院経蔵本寫之□／永辨之（綴目）寛文十一年六月廿四日虫弘□／砌以石水院経蔵本寫之／永辨之	亥正月十四日朱點了同令一校之／同十六日對永辨奉重校了琳弁							寛文九年己酉七月九日以石水院経蔵／之本寫之了沙門永辨
寛文十二年	寛文十二年	寛文十一年	江戸中期	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文九年	寛文九年

1673	1673	1673	1673	1673	1673	1672	1672	西暦
延宝元年	寛文十三年	寛文十三年	寛文十三年	寛文十三年	寛文十三年	寛文十二年	寛文十二年	和暦
賢首院本を書写	石水院経蔵本を書写	石水院経蔵本を書写	石水院経蔵本を書写	石水院経蔵本を書写	石水院御本を書写	石水院経蔵本を書写	石水院経蔵本を書写	活動事項 (書写・伝受・その他)
華嚴經文義綱目	知識讃嘆	正月十九日講經	涅槃講表白	表白	天主光天女	略付法傳口筆卷下	略付法傳口筆卷上	資料名
123	197	197	197	83	197	112	112	函
13	24	22	64	70	23	45	45	番号
						2	1	子番号
永辨	(奥書) 寛文十三年七月九日以／石水院経蔵之本寫之了／花嚴宗沙門	者也 佛子永弁	(奥書) 寛文十三年七月四日／以石水院経蔵之本奥／不足也定經可有之間／後見出可書補者也／大切之本／沙門永弁(追記) 此講經等ハ東十八箱有之／但目錄之外去々散在余／箱可有之間蟲拭之次可相／尋	(本奥書) 寛文十三年七月一日以石水院／経蔵之本寫之了／花嚴宗沙門永弁	(奥書) 于時寛文十三年七月／六日以石水院御本寫之了／沙門永弁			備考 (奥書・その他特記事項)
延宝元年	寛文十三年	寛文十三年	弘化三年	寛文十三年	寛文十三年	寛文十二年	寛文十二年	書写年代

江戸時代の高山寺僧「永辨」について（徳永）

1682	1682	1681	1681	1680	1680	1680	1679	1678	1675	1674
天和二年	天和二年	延宝九年	延宝九年	延宝八年	延宝八年	延宝八年	延宝七年	延宝六年	延宝三年	延宝二年
石水院経蔵本を書写	校了	書写	高山寺閼伽井坊にて華嚴宗沙門永辨書写	寶性院の本を書写	賢首院板本を書写	書写	石水院東第八箱定真自筆本を書写	賢首院にて中坊経蔵本を書写	石水院経蔵の定真自筆本を書写	善財院虫供養の砌、書写
抄 華嚴宗所立五教十宗大意略	(演藏鈔目錄)	高山寺修正後夜導師作法	五十五善知識講式	毎月善知識供式 高山寺	十六羅漢識見頌拔書	仏生会講式	(勸内下)	修禪要決全	明恵上人病中並夜作法	虫供養表白
123	137	197	48	168	113	113	99	125	159	87
30	15	66	5	11	77	9	18	40	7	105
	20									
	天和二年校了 永辨		延宝九年 ^{辛酉} 正月十日於高山寺閼伽井坊／書写 ^早 華嚴宗沙門永辨				此一巻石水院東第八箱有之定真之御自筆也以件本写書之沙門永辨		永辨五十才	
天和二年	天和二年	江戸中期	延宝四年	延宝八年		延宝八年	延宝七年	延宝六年	嘉永七年	延宝二年

1694	1689	1688	1685	1685	1684	1684	1683	1682	西暦
元禄七年	元禄二年	貞享五年	貞享二年	貞享二年	貞享元年	貞享元年	天和三年	天和二年	和暦
道練本を借用し書写	書写	書写	明恵上人の「学問印信」掛板を複製	虫供養の時書写	中坊経蔵の本を書写	中坊経蔵の本を書写	中坊経蔵の顕証自筆本を書写	東大寺で五教章聴聞の余暇に琳弁が借り出し書写し、さらに永辨書写	活動事項 (書写・伝受・その他)
五蘊観并聞書	華嚴五十要問答後卷	四座式音義明悟上人	「学問印信」掛板(複製)	表白	光言句義釋聽集記卷上	光言句義釋聽集記卷下	光明眞言句義釋鈔	五教章上卷聞書上自一乘義至分教開宗	資料名
125	123	113		87	118	118	118	123	函
33	11	76		106	49	50	47	18	番号
									子番号
元禄七年六月令借用件道練本写書之了 十無盡院沙門永辨六十九歳	元禄二年八月十四日写書之不恥悪筆拭老眼 沙門永辨六十四歳		掛板作成						備考 (奥書・その他特記事項)
元禄七年	元禄二年	貞享五年	貞享二年	貞享二年	貞享元年	貞享元年	天和三年	天和二年	書写年代

以下、年次未詳につき、書写奥書の順に配列

								西暦
年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	和暦
顕証本を書写	書写 寛永元年、行乗本を顕証が 書写し、この年以降顕証本 書写	証本を書写 寛永元年、印玄上人本を顕 証が書写し、この年以降顕 証本を書写	寛永元年、菊師より顕証が 伝受され、この年以降、永 辨加筆	所持	所持	所持	所持	活動事項 (書写・伝受・その他)
第九大事記 顕證上人	第九大事 小嶋大事當流相承由來行乗 法印所注	第九大事記印玄上人	番心五 永辨血脈	番心五 包紙	普賢法	法流大底	(無題作法)	資料名
110	110	110	110	110	111	112	155	函
83	83	83	80	80	117	6	1	番号
2	4	3	2	1				子番号
これ以降に顕証本を書写			真空上人已下血脈不載之後世相承 迷之歟／依之愚僧別紙書之番心五 一枚之内籠之／印玄上人記并齋怡法 印記相承次第以寫之／于時寛永元 年八月十日對菊師伝受之後記之／ 下資顕証／東禪院／理覺房心蓮	(表書) 番心五 永辨上人	外題下「永辨之」	(裏表紙) 永辨／新寫之本／十無盡 院聖教ニ有之／分明見安也	(表紙) 高山寺／地藏院 (表紙見返) 永辨	備考 (奥書・その他特記事項)
江戸初期	江戸初期	江戸初期	江戸初期	江戸初期	室町末期	室町初期	室町初期	書写年代

											西暦
年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	年次未詳	和暦
書写	所持	所持	所持	書写	宥嚴より許可印信を授与	所持	書写力	中坊の本を書写	永辨に至る血脈	所持	活動事項 (書写・伝受・その他)
梵網經古述記聴聞備忘記	覺	大方廣佛華嚴經十無盡藏品	大方廣佛華嚴經卷第五十二	尊勝院律師快禪許可事	宥嚴授與許可印信 永辨受者	華嚴善知識禮文	佛光三昧觀異本	法則集	(印可作法及血脈)	菩提院流傳受記	資料名
137	155	155	155	110	110	119	123	197	137	95	函
15	43	8	7	150	185	43	42	30	18	16	番号
19					2-7				1		子番号
沙門永辨 (奥書) 古述聴聞初為廢／忘記之	先師永辨閣梨行用次第／可秘帳中 (表面) 一鳥羽繪 重宮入／四軸	永辨自筆か	永辨阿闍梨平常為持経所書也	(奥書) 永辨書之	印信・目録等一括		(表紙) 永辨 私拔出之	(奥書) (朱書) 「此聲明集先師隆弁上人御筆也」以中坊三卷之法則寫取之仍為正本者也／沙門詠弁	大日より永辨に至る血脈あり	(表紙) 永辨之	備考 (奥書・その他特記事項)
江戸末期	江戸中期	江戸中期	江戸中期	江戸中期	江戸初期	江戸初期	江戸初期	江戸初期	江戸初期	江戸初期	書写年代

右の年表から明らかになったことを掲げておく。

1、永辨は寛永三年（1626）に生まれ、没年は未詳であるが、記録としては、元禄七年（1694）「五蘊觀并聞書」を書いたことが知られ、永辨六十九歳であつた。その後の記事は見当たらない。「華嚴五十要問答後卷」の奥書に「元禄二年八月十四日写書之不恥惡筆拭老眼 沙門永辨六十四歳」とあることから、元禄七年以後没したものと見られる。

永辨の活動として最も多いのは、聖教の書写で、少な

くとも一〇〇回に及んでいる。最も早いのは、寛永九年（1632）の奥書を有する「高山寺涅槃會法式」（133函3）であるが、当時永辨はわずか六歳であり、疑念なしとしな
い。その次に書写が確認できるのは、寛永二十年（1643）の「大樂金剛不空眞實三摩耶經般若波羅密多理趣品」（36函5）で永辨十八歳の時であって、十二年の開きがある。書写の初例に關しては引き続き検討したい。

次に多いのは、伝受に関するもので、宥嚴から延べ十回（印信授与も含む）、顕証から八回、不明三回の記録がある。最も早い伝受は、正保四年（酉）宥嚴より「持戒

清浄印信」を伝受されたときで、永辨二十二歳の時である。その三年後には、同じく宥嚴から両部灌頂、さらに伝法院流も伝受されている。顕証からの伝受はそれより遅れ、寛文三年(1663)に東密の安井流、さらに同年両部印可を受けているのが最初である。このことから、永辨は初め宥嚴から、後に顕証からも伝受を受けていることが判明する。逆に、永辨からの伝授については、今のところ確認できる記録が見られない。筆者が以前検討した「持戒清浄印信」を巡る受容に関しても、永辨から他の僧侶に対する印信の授与は、文化五年(1808)慧友の奥書を有する「持戒清浄印信」(157函33-8)一通にある血脈に、

宥嚴僧正
—— 顕証
—— 永辨
—— 詮弁
○—— 宥弁——(以下略)

とあるだけで、永辨が直接詮弁に伝授したという資料は見られない。^(注九)

その他の活動として、榎尾、東大寺の講義に参加したり、求聞持法を修する、校合・勘注を加えるなどや、導師を務めるなどの履歴が知られる。

(二四)

2、次に、永辨の活動範囲について言及する。永辨は十無盡院十六世であるので、当然「十無盡院」あるいは「關伽井坊」における活動が大半である。その他、高山寺内の僧房としては、賢首院が二回、中坊(観海院)が一回登場する。寺外においては、仁和寺(七回)、東大寺(五回)、高野山(三回)となっており、意外に活動範囲が広いことが感じられる。もちろん、仁和寺、高野山では真言宗関係の書写を、東大寺においては華嚴宗関係典籍の書写や五教章の聴聞に参加している。これらから、永辨は明恵上人と同様、華嚴・真言兼学の僧侶であったことが知られるのである。

3、書写を行った底本について見るに、寺内石水院経藏本を書写することが大半であるが、中坊(観海院)本も次いで多い。その他寺内僧房名を見るに、善財院、賢首院がある。寺外として最も多いのは、師である顕証本(法住庵も含む)が十八回と多数を占める。^(注十)しかしながら、永辨最初の師と目される宥嚴の本を書写したという記録が見られないのは注目される。

ほかに、高山寺草創期の明恵上人、義林房喜海、空達房定真の自筆本を書写したという記録もみられる。

4、永辨の書写した資料にはヲコト点が加点了た聖教がある。まず、寛永二十一年（1744）に「金剛界次第」を書写しているが、これには円堂点が加点了たており、永辨による書写・加点的初例と見ることができる。これは、その奥書によれば、灌頂加行の時に観海院本を書写したのが現存本であるという。円堂点は主に仁和寺において用いられたヲコト点であり、灌頂というのも仁和寺の宥嚴との関わりも想起される。円堂点の加点的資料は他に三pointsがあり、主に永辨二十代の頃である。

他に、東大寺三論宗点の加点的資料が一点現存する。万治三年（1720）宥嚴より伝授された「最極秘密灌頂印」一通に、朱点の東大寺三論宗点加点了たされている。真言宗菩提院流の伝授であり、あるいは宥嚴による加点的とも考えられるが、永辨が全く関与していないとも見られないのではないだろうか。築島裕氏は、このヲコト点の使用

について以下のように述べている。^{（注十二）}

東大寺点とは、東大寺、醍醐寺、石山寺、高野山、勧修寺の各寺に行はれてゐたことが知られる。これらの寺院で加点了た聖教類は何れも真言系統の密教関係の經典儀軌類であつて、東大寺点が真言宗の中に広く行はれてゐたことが明であるが、真言宗の中でも聖寶の流を引く、所謂小野流の系列の中で多く行はれたことが顯著である。^{（築島1996、p.467）}

このことから、仁和寺の宥嚴が東大寺三論宗点を使用していたとしても不自然ではなく、高山寺においても、主に理明房興然の流れを引くヲコト点として広く使用されてゐたものである。^{（注十三）}

以上、永辨に関する事績について、その活動履歴の概略を高山寺内に現存する記録から辿ってみた。今後、寺内の広範な活動内容と照合した調査検討を続けて行きたい。

注

- 一、徳永良次「高山寺諸院代々一覧」、平成十九年度高山寺典籍文書綜合調査団編「研究報告論集」、2008年
 - 二、『古寺巡礼 京都15 高山寺』、井上靖／葉上照澄、淡交社、1977年
 - 三、注一に同じ。
 - 四、『密教大事典』、法蔵館、「覚深」「顕証」の項
 - 五、『高山寺典籍文書の研究』、東京大学出版会、1980年
 - 六、「現代密教」第27号、総本山智積院、2017年
 - 七、徳永良次「高山寺における方便智院聖教について 定量分析の試み」、「訓点語と訓点資料」第一二七輯、訓点語学会、2011年
 - 八、北海学園大学大学院文学研究科『年報 新人文学』第七号、2010年
 - 九、注八に同じ。p 114。
 - 十、ただし、顕証本であっても、高山寺経蔵の蔵書である聖教を書写している事が多い。
 - 十一、築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』、汲古書院、1996年
 - 十二、宮澤俊雅「高山寺に於ける理明房興然流口決の訓点の相承について」(「訓点語と訓点資料」第九五輯、訓点語学会、1995年)
- 付記 本稿は、平成28年度 北海学園学術研究助成(一般)による成果の一部である。